



佐藤友哉初期短篇作品論

森田真功

ここに収められている二つの文章はどちらも過去の文学フリマにおいてコピー誌で頒布されたものである。ありがたいことに手元には在庫がまったく残っていない状態なのだが、意外にも問い合わせの機会が多く、また自分にとっても思い入れのつよいものなので、このようなかたちをとり、再発表させていただくことにした。それにあたって、もちろん誤字や脱字の訂正は行ったが、しかし基本的な内容にはいつさい手を加えていない。せつかくだから大幅に改稿しようかというアイデアもあつて、検討はしてみたものの、結局のところ取りやめたのには理由がある。そしてそれは『最果てにて——佐藤友哉「『世界』の終わり」論』（05年）の内容と深く関連している。『最果てにて』は、副題にあるとおり、佐藤友哉の小説『『世界』の終わり』

を論じた内容となっている。けれども、最初におことわりしておかなければならないのは、現在『世界の終わりの終わり』として書店などで手に入る単行本を題材にしているのではなく、またそのなかの一話だけを取り出し、取り上げているのでもなくて、あくまでも『新現実』誌の一号目（Vol.1）に掲載されたヴァージョンの『『世界』の終わり』を一篇の作品として見、対象とし、書かれているということである。

いま、そうした前提を述べたのは、以下のような事情による。『『世界』の終わり』（それから、やはり『新現実』誌にて発表された「『世界の終わり』」、『世界の終わり』の終わり）をあわせた三篇）は、単行本化されるさい、作者の手によって大幅に加筆修正されている。その結果、まったく性格の異なった作品に生まれ変わっている。端的な

ところでは、作中のサブ・カルチャー濃度とでもいうべきものが、おおきく違っている。じつは『最果てにて』は、『『世界』の終わり』を祖上にのせつつ、90年代から00年代にかけての文学とサブ・カルチャーと自意識の交わりを論じたものであつて、三者のバランスは、『新現実』掲載ヴァージョンの『『世界の終わり』』と、それをはじめて読んだときの感想を基準としており、この点、そしてそれはもつとも重要だと思われる一点に関して、ぶれや混乱が生じてしまう可能性を踏まえ、避けるべく、あえて『世界の終わりの終わり』への言及を導入したり、論旨そのものに事後的な再調整を加えたりすることはしなかった。このことの意味は、じつさに『最果てにて』を読んでもらえれば、ご理解いただけるだろう。

さて、『最果てにて』も、もうひと

つの文章である『異者の攻防——佐藤友哉「慾望」論』（06年）も、作家論というよりは作品論に近い書き方をしているのに違いはないのだが、『最果てにて』が、その作品の成立をめぐる状況、いわばコンテキストに重きを置いているのに対して、『異者の攻防』では、佐藤の短篇集『子供たち怒る怒る怒る』に入っている「慾望」を、なるたけコンテキストを排除したうえで、どれだけ精読できるか、を試みており、そういった意味で、両者は異なった性質を持っているといつて良い。あわせて読んでいただくことで、佐藤友哉という、00年代に登場し、しかしまだ十全に語られているとは言い難い作家が、この国のこの時代をいかに描写したか、そしてそのことの成果を、すこしでも実感してもらえれば、さいわいである。